

# 山代巴の文学／運動

竹内 栄美子

## 1 報告の趣旨

山代巴の文学／運動を語るとき、いつたいどのような視角からであれば最もいきいきとした像を結ぶのであろうか。かつて私は拙論「戦後文化運動への一視角 山代巴・中井正一の実践と論理」(「日本近代文学」第七一集 二〇〇四年一〇月)において、戦後文化運動を開始するにあたって日本共産党が過去の事績を継続する意識のまま「無批判の継承」のうちに始めたことを批判的に取り上げ、その対極にあるものとして山代巴を論じたことがあった。戦後文化運動を強力に牽引した日本共産党の文化政策、サークル運動をはじめとする民衆の表現意識とその実践、そのような状況のなかでの中野重治の位置づけ、という問題意識を出発点として考察したのだったが、そこから山代巴が浮上してきたのである。

敗戦直後、中井正一によって広島県尾道から始められた文化運動に参加した山代巴は、多くのひとびとを魅了した中井の講演にひきつけられ、中井のもとでたくさんさんのことを学んだ。山代自身は言及していないけれども、中井の論じた「ミッテルの媒介」すなわち「透明な媒介」ということをみずからに課し、農村の抑圧された女性たちの声をくみあげていった点をはじめとして、中井の

論理を自身の実践のなかに活かしていく。

山代の最初の小説『露のとう』は、封建的な環境のなかで、ひとりの人間として人権どころか人格さえ認められない農村の女性たちのくぐもつた声を聞き取り、それを誰が情報源であるか分からないような朦朧体的語りの方法で形象化した作品であった。長く日本の女性が置かれてきた苦難と忍従の立場に寄り添いながらその悲しみをこまやかに描いた小説である。山代の小説は、自分が情報源だと分かかってしまえば、村八分にされてしまいかねない環境で生きる女性たちの声をしていねいにすくいとり、そこにどのような根深い問題が伏在しているのかを明らかにしていった。声はひとりのものではなく、女性たちに共通するもので、抑圧された彼女の問題は、「私」の問題でもあり「あなた」の問題でもあった。

『露のとう』について言えば、そこには、女性の問題のみならず、主人公の夫が出世のために巡查として赴任する朝鮮での植民地支配の問題も埋め込まれていた。巡查の夫がいかに朝鮮のひとびとを苦しめて財産をつくったかということが言われていて、女性の問題と同様、植民地問題もこの作品のなかなめになるテーマである。

山代は言うまでもなく作家だけれども、通常イメージされるような書斎派の作家ではない。民衆とともにあり、つねに運動を推進しつつ、その運動のなから書くべきことを見出して書き続けていった作家であった。しかしながら、残念なことに、文学史のうえで山代巴という作家はじゅうぶんな位置づけを与えられていないのも事実である。その見直しが必要だとかねがね考えてきた

が、今回、機会を与えられてこの稀有な女性作家の魅力について語りたい。具体的には、「人民文学」に連載された松田解子との往復書簡『日本の女』を取り上げて分析する。

## 2 時系列に従った七つの局面——三つのテーマ

『日本の女』のテキスト分析に入る前に、山代巴のおもだった活動を七つの局面としてたどり、そこから抽出される三つのテーマについて確認しておく。

(1) 一九一二年に広島県芦品郡栗生村栗柄(現府中市栗柄町)に生まれた山代は、女子美術専門学校(現在の女子美術大学)に入学するため上京する。プロレタリア美術研究所や日本プロレタリア文化連盟での活動に従事し、一九三二年には日本共産党に入党した。一九三二年から三三年には地下活動にも参加したと言われている。女子美の同級生赤松俊子(のちの丸木俊)とは終生の友となり、山代の最初の小説『露のとう』の美しい挿絵も赤松俊子が描いたのだった。山代は、女子美を中退したあと、絵の才能によって図案家(レタリングのデザイナー)として経済的に独立するが、商業主義に疑問をいだき職を辞すことになる。

(2) 一九三七年、警成争議の指導者であった山代吉宗と結婚したのちは、京浜工業地帯に住み旭硝子に女工として勤め、職場の劣悪な環境を改善する契機となった「水鏡」の経験を得る。また、女工仲間、野口豊枝たちとのサークルに力を注ぎ、吉宗の書いた「星の世界」「太陽系の世界」「地球の歴史」などをテキストにして、女工たちの「学びたい」「勉強したい」という思いをく

みあげていった。

(3) 一九四〇年に治安維持法違反幫助で逮捕され、三次刑務所および和歌山刑務所で服役する。そこで出会った女性たち、たとえば前科二十二犯の窃盗犯イツチヨメや看守の重森クラは、山代の人生観に大きな影響を与えた。和歌山刑務所では久津見房子との出会いもあった。この女囚刑務所での経験をもとに、最初の小説『露のとう』を書き、雑誌「大衆クラブ」一九四八年三月号に発表する。いちはやくこの小説を高く評価したのが中野重治だった(『晴れたり曇ったり』「人間」一九四八年六月)。加筆された『露のとう』は単行本として暁明社から一九四九年七月に刊行、さらに『囚われの女たち』全十巻(径書房、一九八六年八月完結)にまで発展していく。この刑務所での経験は旭硝子での経験と並んで、女性の問題、人権の問題を考える契機となった。

(4) 敗戦間際、仮釈放された山代は郷里にもどり敗戦を迎える。「あきらめ根性」「みてくれ根性」「抜け駆け根性」を克服しようとして、ひとびとに届く分かりやすい言葉で語る中井正一の講演に感銘を受ける。中井に協力して進めていった文化運動は十三万人を擁する広島県労働文化協会へと発展していった。自ら意識革命をなし民主主義をつくろうと目指した農村文化運動の出発点だった。

(5) 農村文化運動は、山代にとって生涯の仕事となる。なかでも次項の被爆者救援活動と並んで、農村女性解放運動は、抑圧されてきた農村女性の自己表現の道を探り生活改善にも結びつけていくというものだった。「人の秘密の訴えられる人間になること」を自らに課し女性たちの話を聞き取っていくが、それはセキ

(日野イシがモデル)の一生を描いた『荷車の歌』(筑摩書房、一九五六年)に結実する。「たんぼの会」など女性サークルを育成し、生活記録「みちづれ」の発行に至る。

(6) 農山村を歩く山代の目的は、女性解放問題だけでなくとは被爆者の聞き取りにあった。広島市平和都市宣言を受けて、文化運動や労働運動が高まりをみせるなか、被爆の実態調査に力を入れていく。被爆について語りたがらないひとびとのもとに通い、手記集『原爆に生きて』(三一書房、一九五三年)を刊行、さらに原水禁百万人署名運動をすすめ第一回原水爆禁止世界平和大会(一九五五年)の実現へと結びつく。

(7) 戦前の運動にたずさわった女性運動家の実績をあとづける仕事も重要である。牧瀬菊枝との共編『丹野セツ——革命運動に生きる』(勁草書房、一九六九年)のほかに、牧瀬菊枝編『田中ウタ——ある無名戦士の墓標』(未来社、一九七五年)に収録された「黎明を歩んだ人」、大竹一燈子「母と私——久津見房子との日々」(築地書館、一九八四年)のなかの「久津見房子さんのこと」などの文章がある。これらの女性運動史研究を契機として、敗戦までの自己史を振り返って書かれた『囚われの女たち』は山代晩年の大作となった。

\*  
以上の七つの局面から抽出される三つのテーマのひとつめは、女性をめぐる諸問題である。とりわけ農村の主婦がおかれてきた問題は、フェミニズムが当初掲げた、*no name problem*、(ベテイ・フリーダン)よりも深刻な問題を示していた。誰かの妻であり母である主婦は、妻として母として生きるのみで自分の名前を

持たないという。裕福で教育もあり不自由な暮らしではないのに満たされないという主婦のアイデンティティ・クライシスをベテイ・フリーダンは明らかにしたが、それよりもっと深刻な問題を日本の農村の主婦たちは抱えていた。深刻さの根源には貧困がベースにあるということ、そして何よりも家長制の犠牲者としての存在にほかならないという構造的な問題があった。その一方、当事者の女性の側にも、良妻賢母思想を内面化し、家長制のなかで夫や義父母に従属することを美德とする意識を拭いきれないという根深い問題があった。山代が問うたのは、そのような意識を自覚しそれを変革してどう主体形成していくか、自己の意識改革をどう遂げていくかということだった。

三つのテーマのふたつめは、農村に暮らすひとびとの自己確立の問題である。山代が師事した中井正一は、さきにも触れたように「あきらめ根性」「みてくれ根性」「抜け駆け根性」といった日本人の心性の根底にあるものを克服しないかぎり民主主義を実現することはできないと考えた。他者を貶めることによって自己存在を主張する「落とし合いの連鎖」(牧原憲夫)を断つこと、封建意識を克服し、民主主義をどう形成していくかが何よりも求められた。

三つのテーマの最後は、被爆者救済の問題である。山代は、原爆被害の実態を明らかにしなければならぬと考え奥深い山村を訪ねても容易に語ってくれないひとびとを前に、被爆による差別意識の根深さを痛感せざるを得なかった。また、原爆を問題にするにあたりGHQによる言論統制の壁にもぶつからざるを得なかった。連合軍総司令部広島支所からの呼び出しに応じて出かけて

いくと、二世らしい若い将校から「あなたのように平和と民主主義のために体罰を受けた人が、そういうことを言うのは進駐軍の妨げになる」、今後、原爆を悲惨だと言ったら「沖繩送りにする」と言われたという。このような二重の困難のなかで、被爆者救済の方法が模索された。

これら三つのテーマに共通して言えるのは、何よりも人間の尊厳を重視し、人権問題、平等思想、平和運動としての文学／運動であったということだ。ここに「女性」の問題がクロスしてくるのであって、出発点が女性の解放にあったというわけではなかった。たとえば駒尺喜美が「山代さんや小西さんらずっと運動をやってきた人は、女性問題を中心に運動したり、講演活動したり、グループづくりをしたのではないと思う。女の鬱憤とかを自分たちも感じているから話題にはするだろうけど、意識としては平和運動であったり教育運動だったりする」と述べている（座談会「私たちの山代論」、小坂裕子『山代巴』中国山地に女の沈黙を破って『所収』）ように、山代の運動はフェミニズム思想から導かれたものではなく、人権問題や平等思想、平和運動から発したものであった。このことは、山代が父権的なものに守られていた実態と不可分のことであつたと思われる。これについては、のちに述べる。いずれにしても、山代がこれらの三つのテーマを生涯にわたり追究した作家／運動家であったことは間違いない。山代の堅持したテーマは、なによりも人間の尊厳を重視する姿勢から導かれたものだった。

### 3 『日本の女』について（一）

さて、「人民文学」一九五三年三月六月号に連載された松田解子との往復書簡『日本の女』では、女性作家による視点からどのようなやりとりがなされているのだろうか。

まず、この時期の山代の活動を確認しておく、山代は一九五三年七月九月号「世界」に小説「おかねさん」を連載している。農村の婚家先で苦勞するおかねは、里帰りしたさい、天明一揆で活躍した祖先のことを祖父から聞く。祖先の行動を誇らしげに思う一方、分家の理不尽な叔父夫婦に苦しめられる実家の実情を知ると、婚家先の自分の愚痴は言えないと思うのだった。「女の道は人に従うにあり」と考えるおかねは忍従を内面化した女性である。『日本の女』往復書簡にもこの小説のことはたびたび引用されているが、山代はこのような忍従を内面化したおかねを、必ずしも否定的に描いてはいないのである。むしろ、そこから、おかねのような女性が現実存在するところから出発すべきであることを示唆している。このことは、山代の思想を考えるうえで重要なことだろう。

また、『日本の女』連載と同じころのできごととして、広島県教員組合のワークショップで講演したことがあげられる。山代は、その講演で「錐蛙・笹どじょう・樽蛇」の譬喩を用いて好評を得たという。広島に伝えられるたとえ話を事例にして分かりやすく聴衆に語りかける手法は、中井正一の手法に学んだものだった。この「錐蛙・笹どじょう・樽蛇」の譬喩は『日本の女』往復書簡でも触れられている。

さて、『日本の女』は、まず松田解子の手紙「山代巴さまへ」から始まる。松田が、知り合った中野区江古田の主婦たちにメーデー事件被告への見舞い状を書いてもらおうと依頼したところ、そのなかに夫を「テキ」と呼ぶ手紙があった。松田は、夫を「テキ」と呼ばざるを得ない根本原因として「この日本のすべての制度をつらぬいている封建制と搾取制」があると考えた。そして、その背景に「夫が工場でつくる品物は朝鮮の戦線で、つみもない朝鮮の人民をころすことにつかわれ、妻がたとえ一円でもと家で内職した造花は、アチラさんのキャバレーで靴底にふまれる、それでこちらの暮しは安定するかといえませんがますます不安定になり、その不安定をおさえてふたたびこの日本を戦争にまきこんでゆく」とするものがある、この文字どおりの悪循環」があると言うのだ。朝鮮戦争下、女性がどのような位置に置かれていたかを「婦人と封建制」という問題として提示した手紙だった。

それに対する山代の返信「松田解子さま（第一信）」は次のようなものである。松田の手紙がやや抽象的概念的であるのにくらべて、山代の手紙はエピソードをふんだんに盛り込んで具体的に語っている。この「第一信」では、重要な三点を抽出してみよう。

まず、広島に伝わる伝承にもついていたエピソードを積み重ねて自説を展開していることが注目される。広島は徳川幕府が毛利家のお目付役として浅野の殿様を置いたところだから「広島と言う所は、人を落し入れる気風の強い所だからね」「徳川のいうなりになる、馬鹿を育てなければならぬというので、蝨蛙、箆どじょう、樽蛇の政策を用いたのだから、人が悪くならずには置かないよ」という発言を紹介して、蛙やドジョウや蛇の形象を用いて封

建遣制を語っている。さきの講演でも用いられたこれらの譬喩は、次のような意味を持つものだ。蝨蛙は、頭に蝨を刺されて飛べない蛙のことで、身動きできない状態にさせることである。箆どじょうは、箆に入れたたくさんのドジョウのうち大きなものが上に出てくるのでそれを捕まえて食べてしまうと大きなものはなくなってしまうことから、力のあるものや突出したものを育てないための方策だ。樽蛇は、樽のなかにたくさんの蛇を入れて蓋に小さな穴を開けておくと蛇たちがその穴から我先に出ようとすることから、よつてたかつて互いを落とすし合うことをいう。これらの政策によって民を支配することで「徳川將軍は三百年の高枕で夢が結べた」というのである。

このことは、逆に、村の百姓たちが隣家よりも自家の仕事が進むことを喜び、隣家が落ち目になることを心底ではほくそ笑んでいる「抜け駆け根性」や「落とし合い」の実態にも通じるもので、それはひいては天皇制にも結びつくものだと言っている。農村に顕著な「抜け駆け根性」や「落とし合い」の気風がいやでたまらず故郷を出たものの、東京でも川崎でも「働く所にはみなこの悲しみ」があったと述べて、その根源を天皇制に見出している。中井の講演の手法に学びつつ、よく知られた伝承を用いて自分たちが抱える問題を明らかにしている点が注目される。

松田にあてた「第一信」で注目すべき二点目は、東京拘置所にいたころに受け取った父の手紙のことである。そのなかに「癩癩の杓では水が汲めぬ、理屈の靴は馬も穿かぬ」という諺があった。父からの諭しは「癩癩、つまり踏みじられた人間の、くやしいと思う心も捨てよ、真理をさぐるうとする心も捨てよ、おかみの

いはれるままになれば、刑を着ずに帰れるのだ」「筋道正しただけでは救はれず」ということだったが、これは端的に言えば転向の勧めにほかならない。しかし、山代はこの手紙に反発するのではなく、親の苦しみが身に応えたと述べている。そして、この諺の由来を尋ね、さらに父がそれに喜んで答えるというやりとりがあった。

ここから想起されるのは、中野重治の転向小説『村の家』（一九三四年）における父孫藏の勉次にあてた手紙である。獄中の息子に対して、母ではなく父が手紙を書く。孫藏の手紙は、息子が検挙されたあとの母の不調を伝え、しかし自分は老いてはいても一家の家長としての役割を果たしているというものだった。山代の父の手紙も同じようなものであり、父という存在が彼らにどのような意味を持つていたかを考えざるを得ない。山代に関していえば、父のみならず山代吉宗の存在、あるいは郷里の恩師藤原覚一、戦後に師と仰いだ中井正一、栗原佑、武谷三男らとのつながりが思い出されよう。山代を積極的に起用した岩波書店「世界」編集長の吉野源三郎も加えていいかもしれない。ここに父権的なものに幾重にも守られている山代巴が浮上してくるが、このことは、先に確認した「女性」の問題が先行するのではなかった山代の思想性にもつながってくる。これを限界と見るか、プラス点と見るか、評価が分かれるが、リブ・フェミニズムの思想と重なりながらも基点ではあり得なかつたことを凌駕する内実を山代の仕事が見せたことは事実であろう。

注意すべき三点目は、父の手紙で知ることになった、祖先が関わった天明七年の百姓一揆勝利のことである。天明期は、厳しい

飢饉のために東北では人肉まで食したと伝えられ、一揆、打ち毀しが各地で広がった。一揆に勝利した天明七年（一七八七年）について山代はこのように述べている。「フイラデルフィヤでは合衆国憲法が創定され、翌々年一七八九年は仏国革命の年です、もし天明の一揆の頃、日本の総百姓が勝利していたら、日本は先進国であつたでせうに、そして又『痲瘋の杓では水が汲めぬ、理屈の靴は馬も穿かぬ』等と言う、悲しい諺が農民の慰めとなるようなことはなかつた」「欽定憲法下の歴史では、私どもは自分の先祖の行つた、革命的行動については、思いも染めない位、何も知らされなかつたのです」。

「農民の中の革命的伝統」を掘り起こして受け継いでいくことが重要だと言うのだが、ここからやはり中野重治『梨の花』（一九五九年）のなかに点描された一揆「みのむし騒動」が思い出される。「みのむし騒動」は、中野の少年時代を思わせる主人公の良平がおばから聞かされる昔話のひとつであり、その「みのむし騒動」によつて祖父が獄につながれたというのだ。実際の「みのむし騒動」は、浄土真宗が盛んであつた北陸の越前大野から広がつた宗教一揆だつたらしいが、『梨の花』に描かれ、また転向出獄後に書かれた『刑務所で読んだものから』（一九三四年）では「一揆」「大衆行動」とされている。この『刑務所で読んだものから』のなかには、本庄栄治郎『日本社会経済史』にもとづいて天明の打ち毀しでは江戸、京、伏見などに並んで広島も盛んな土地だつたことが触れられている。

山代の言う天明の一揆にしろ『梨の花』の「みのむし騒動」にしろ、民衆の自主的行動が前景化されていることに留意したい。

山代は天明の一揆を「革命的伝統」ととらえていた。つまり、民衆の「集団的意志」(グラムシ)こそが歴史を変えていく可能性を持つているということであり、農民自身がなした偉業をまず知ることが大事だということである。この往復書簡が書かれた一九五三年の前年、一九五二年には「民衆と女性の歴史」をつづった石母田正の『歴史と民族の発見』が刊行されていた。この『歴史と民族の発見』に接続するような「民衆」の観点を山代も共有していたのであり、一九五〇年代は、前衛の指導によるのではなく民衆の自主的行動により集団的意志・社会的意思をどう形成していくかということが大きなテーマであったと言えるだろう。これは中野重治のテーマでもあり、山代巴のテーマでもあった。

#### 4 『日本の女』について (二)

山代『日本の女(第二信)』と『日本の女(第四信)』のあいだには、松田『日本の女(第三信)』があるが、これは江古田の主婦たちのその後について述べたもので割愛する。いずれ松田解子のことを取り上げて論じる機会を待つて改めて考えてみたい。

松田のことはさておき、『日本の女(第二信)』では自作『おかねさん』のことが、『日本の女(第四信)』では松田の述べた夫を「テキ」と言う主婦のことがそれぞれ取り上げられている。なかでも『日本の女(第二信)』では、とりわけ次のような記述が眼を引く。山代はこう言っている。「ともすると進歩的女性の運動が、オカネのような姑を批難攻撃することによって、自らの民主性、又は進歩性を証明するかののような香を発散させていることに

は、私は嫌悪さえ感じます」。

エリート臭を感じさせるような「進歩的女性の運動」に対する嫌悪が表明されている記述である。すなわち山代の立っているところは、「進歩的女性」による理念や観念で裁くことのできない生活の現場であり、都市とはまったく別の論理で動いている農村の現場なのであった。そしてそれが当時の日本における大多数のひとつとの現実であったと思う。山代が着目したのは、そのような当時の日本の大多数の現実だったのであり、そこから発する存在の重みを感じせざるを得ない。

ただし、その一方、このような山代に対する強烈的な批判もあった。のちのことになるが『荷車の歌』に対して放った谷川雁の鋭い批判である(谷川雁『女のわかりよき——山代巴への手紙』『サークル村』一九五九年三月)。谷川の批判を簡約すれば、「九州に上野英信あり、中国に山代巴あり」さらに木下順二の「夕鶴」を加えてもよいがこれらが「究極的に現状維持の態度」を生み出しているというものだった。わかりやすい物語の「健康さと衰弱」の両面を指摘しつつ「感動しました、震えました、それで終わり」では何事も変わらないと言うのである。

山代の回想『戦中の職場体験から』(『未来』一九七二年八月号)によれば、谷川雁は「私の衿をつかまえてゆさぶらんばかりの情熱をこめて、私の作品『荷車の歌』の主人公セキが、体制側に都合のよい発想の持ち主であることをなじつて、こんな主人公を描いているかぎり、家族からの解放もなければ、古い共同体へ風穴をあけることもできはしない、と激怒した口調で攻撃」したという。谷川の『荷車の歌』のセキへの批判は、むしろ『おかねさん』

のおかねを批判することにもなるだろう。おかねこそ忍従を内面化した女性であり、山代はそこから出発することを強調していたからである。しかし、山代は、谷川の強烈な批判に与することなく、当手を振り返ってこう述べている。「最も体制的に飼いならされた人々が、「よそにもわしによう似た人間がおるわい」とか、「うちのお祖母さんもこんな苦勞をして来たんだらう」とか、「わしの方がセキよりもずっと苦勞して来たよ」とか、そんな胸襟を開く言葉の輪を作ってくれば目的は達成されたものと思ってもいいものなのです」。

山代によれば「最も体制的に飼いならされた人々」が自分で気づくことが何よりも大切なのだった。山代は、あくまで古い共同体を足場にしてそこから出発する。筑豊を足場にした上野英信もそうだった。谷川の批判は、山代にしる上野にしる、谷川自身が強く意識せざるを得ない作家だったからこそなされたものだったのだが、目指すところは変わらなくてもそれぞれの手法がまるでも異なるものだったということだろう。牧原憲夫「解説 身をさらす精神」(『山代巴文庫第二期 荷車の歌』)では、北風と太陽の譬喩を用いて、谷川を北風、山代を太陽と規定している。山代の太陽は、たとえば『日本の女(第四信)』のなかで、松田の第一信および第三信で語られた夫を「テキ」と呼ぶ主婦についてこう述べていることからむしろぶん理解できることである。

身動きできない袋のなかからどうしたら抜け出すことができるか、それは「自分を監視している家族の中のテキや隣人の中のテキと、自分との間に出来た思想上の溝を埋めて行く努力の中で得られるのだ」という。多くの文化的催しがある東京とは違って「都

会から遠く離れてそれらのものに恵まれない人間は、いつまでも孤立していたら、知識は概念に変わって、はつらつさを失ってしまった、持っていた筈の民主的思想や感覚にかびがはえてしまう」。だから、「二人から二人へ、二人から三人四人と自分の理解者をふやして来なければならぬ。そのためにはどうしても、自分を取りまく無理解との間の溝をうずめて行くより他に道がない」と言うのである。

ここには、都市生活者とは異なる農村での生き方に立脚して、自分の理解者・賛同者を増やすこと、巻き込んでいくという戦略が語られている。谷川雁とは異なる戦略を山代自身自覚して選び取っていたということだ。「溝」は相手とのあいだに一本あるだけではなく、場合によっては自分のまわりに堀のように何重にもつくられて厳しい孤立を強いられることもあったに違いない。理解者・賛同者を増やす、巻き込んでいく、この「involve」の戦略は、言うまでもなく、さきに確認した民衆の自主的行動による集団的意志・社会的意思の形成とも深く関わっている。山代の運動を振り返れば、旭硝子の女工たちとのサークルや刑務所での女囚や看守とのつながり、戦後の農村文化運動や原爆被害者救済運動など、すべての運動がひとびとの自主的行動をうながすものであったことに留意したい。ひとびとを「involve」していく、そのかなめに山代自身が「媒介」となって存在していたのだった。

## 5 一九五〇年代女性運動への批判

ところで、このような山代巴の文学／運動は、一九五〇年代の

農村における生活改善運動のひとつとして数えられるだろうが、これを含む一九五〇年代女性運動に対しては、谷川とは別の、やはり強い批判があった。たとえば、上野千鶴子「戦後女性運動の地政学——「平和」と「女性」のあいだ」（ひろたまさき キヤロル・グラッグ監修、西川祐子編『歴史の描き方②戦後という地政学』所収 東京大学出版会、二〇〇六年）では、第一波フェミニズムと第二波フェミニズムのあいだに位置するふたつの女性運動として、戦時下の女性運動と一九五〇年代の女性運動をあげている。戦時下における大日本婦人会の戦争協力運動と並んで批判の対象になっているのは、全国的な平和運動、農村部における生活改善運動や農村合理化運動、都市部における消費者運動などを展開した一九五〇年代の女性運動であった。

たとえば、一九五五年、第一回母親大会宣言に見られる「女性Ⅱ母親Ⅱ平和主義者」という本質主義に上野は強い批判を示す。第五回大会分科会での谷川雁の「皆さんは、戦争中赤飯を炊き、日の丸を振って僕らを戦場に送った」という発言を引用しつつ、「戦後的な母性平和主義は、かつて「母性」が積極的に戦争に動員された事実を忘れ去る点で、歴史的健忘症であるというのだ。ここで引用された谷川雁の批判は『母親大会への直言』（婦人公論）一九五五年十月号）に見ることができ。これについて、松本麻里「工作しきれないものとしての「女」」（『KAWADE 道の手帖 谷川雁』河出書房新社、二〇〇九年）では、「戦時中、皇国の母が美談とされ、母性概念がファシズムの支柱となったことを思いおこせば、彼の強引さも正鵠を得ている。だが一方で、靖国神社・母親大会ともその女性動員のイデオロギー的側面を指弾すること

はたやすいことである。そして当の動員される女の後進性を鼻で笑い、変革の主体として不的確であると拒むこともたやすい。しかし谷川は「拒もうとしても避けることのできない私自身の母親たち」としてこの「母たち」をやっかいながらも引き受け」と言われている。

先に確認したように、谷川が山代巴を認めていたがゆえに強烈に批判したことが想起されるが、上野の観点は、一九五〇年代女性運動の巨大な規模にもかかわらず（巨大な規模であったがゆえに、と言うべきか）、「平和への動員」は「戦争への動員」に対するどのような自己批判のうえに立っていたのか、というきわめて核心的な問題点を提出していた。すなわち、一九五〇年代女性運動は「恒久平和」という空疎なシンボルがむやみに声高に言われただけであり、「平和」の概念を再審し加害と被害の重層性を問うたのちの運動と対比して、規模は大きかったが思想的には貧しかったというのが、上野の評価である。このことは、すでに一九五〇年代なかばに、鮎川信夫が『死の灰詩集』（一九五四年）を戦時中の「辻詩集」と同じだと徹底して批判した議論にも通じていよう。

鮎川の提示した問題は、冒頭述べた「無批判の継承」のうちに戦後文化運動が始まったことと不可分の内容を持つている。戦時下と地続きの戦後のありようをいちはやく取り上げて批判した発言で、確かに、重要な問題提起であったに違いない。いわゆる時局詩の弱点は、鮎川の問題提起を基点としてこれまでもたびたび論じられてきた。ただし、『死の灰詩集』に収録された詩をひとつひとつ見てみると、いまここで詳しい分析はできないが、たとえば真壁仁「石が怒るとき」は、古生代の時代からの自然が破

壊されることへの怒りをうたい長い歴史のスパンで事件をとらえた、優れた詩であることは間違いない。「ぼくら」が失ってしまったものへの哀惜と、そうさせたものへの怒り、死を強制されることへの怒りが、巧みな擬人法と硬質な言葉の力によつてうたわれている。要は、ひとまとまりの評価を一刀両断にくだすことなく個々の発する声に耳を傾けていくことが大切なのだが、一九五〇年代女性運動についても規模の大ききかげに隠れて見えなくされている文学／運動に目を向けることが必要だろう。

あるいは、一九五〇年代女性運動に対する上野の批判と同様、次のような批判もあげておきたい。座談会「女たちの山代論」（小坂裕子『山代巴 中国山地に女の沈黙を破つて』所収）に見られる加納実紀代の「山代さんは「一人の百歩より、百人の一步」ということを基本にしておられますね。そして明日の解放を信じて今日の苦勞を堪える。それはとても立派なことだと思えます。ただ私自身は、遠いかなたに理想の目標を置くのではなくいまを生きる、人のためではなく自分自身を生きる、と言いつける金子文子に共感します」という発言である。

理想のため、誰かのためにではなく、いまを生きる、自分自身を生きたることに輝きは、誰にも否定できないことだろう。それは、父権もしくは男性に守られた存在としてではなく、女性が女性の問題を自分自身の問題として自ら語ることをなによりも重視する、そのような姿勢にもつながるものに違いない。ただ、そのことをじゅうぶん認めながらも「一人の百歩より、百人の一步」という言葉の重みもまた了解されるのである。

すなわち山代は、突出した個人に重点を置くのではなく、先に

も確認したように民衆自身の「集团的意志」の形成に信頼を置いていた。たとえば、グラムシはこのように述べている。「新しい文化を創造するということは個人的に「独創的な」発見をすることを意味しているだけでない。それはまた、そしてとりわけ、すでに発見されている真理を批判的に普及させること、それらを行えば「社会化」すること、したがって、それらを枢要な活動のための基礎、知的ならびに道徳的な配置と秩序の要素になるようにすることを意味している。一群の人間大衆が現に目の前にある現実を首尾一貫した統一的なしかたで思考するようになることは、ひとりの哲学的天才によつてなされた、小さな知的集団の世襲財産にとどまるような新しい真理の発見」か、ということである。閉鎖的な集団のなかでしか通用しない真理はさして重要ではない。大事なものは、発見された真理を「社会化」することであり、ひとりの優れた哲学者によつてではなく民衆自身が現実を正しく認識し分析すること思考することが求められているのだ。

ここに山代が師事した中井正一の「委員会の論理」を接合させることもあながち間違ではないだろう。集团的主体の相互批判と協同性の機構が、中井の言う「委員会」であったが、中井『集團美の意義』（一九三〇年）では「一人の天才、一つの個性」より

も「多くの個人の秩序ある協力」「集団の性格が創りだす芸術」が論じられていた。一九三〇年は時代的にみても集団主義が標榜された時期だったが、そのことを踏まえただけでも、中井の議論には個人のかげがえのなさを認識しつつも協同的な集団でなし得ることの可能性が言われているのである。のちの図書館についての知のネットワーク論なども想起されよう。

このように、グラムシと中井を接合させると、山代の「一人の百歩より、百人の一步」には、さきに見た理解者・賛同者を増やす、巻き込んでいく、*involve* の戦略とならんで、一人の天才よりも民衆による現実把握、相互批判と協同性の集団的主体ということも含意されていたに違いない。そのような解釈を許す幅の広さを山代の文学／運動は持っていた。

\*

一九一二年に生まれ二〇〇四年に九十二歳で亡くなったこの長命な作家／運動家は、反戦平和や人権思想の実現のためにその生涯を費した。本人の文章やささまざまな人たちの思い出の文章などからすると、旺盛な好奇心とすべてに学ぶ意欲と姿勢を持った、

かなりチャーミングな女性であったのだろうと思われる。『山代巴文庫』に収録された文章群には、魅力的なエッセイが数多く見られる反面、小説になると雑誌初出の『露のとう』などを除き、描写の欠落（説明文の過剰）によって魅力が半減する作品が多い。この分析も今後の課題だが、以上見てきたような民衆自身の「集団的意志」の形成に信頼を置いていた山代巴の思想は、戦後文化運動をとらえ直すとき、改めて検討されるべき内実を持つている。

### 参考文献

『山代巴文庫』第一期全十一巻『囚われの女たち』ほか（径書房、一九八八年）

『山代巴文庫』第二期全八巻（径書房、一九九六年） 牧原憲夫解説

牧原憲夫編『山代巴獄中手記・書簡集』（平凡社、二〇〇三年）

小坂裕子『山代巴 中国山地に女の沈黙を破って』（家族社、二〇〇四年）

佐々木暁美『秋の蝶を生きる』（山代巴研究室、二〇〇五年）ほか